

潮 流

水 と 森 林

代表取締役社長 佐藤 純二

北京の大学から招聘した二人の教授を、日本の農業の現場を知ってもらうため、九州の宮崎にご案内した。その際に、お二人が日本の鬱蒼と茂る森林を持つ緑豊かな地方の風景に、賛嘆と羨望の声をあげていたことが強く印象に残った。

そして改めて思い知ったのは、多くの日本人が当たり前のように小さい時から目にし、心象風景としている、里山から山道を登り奥山の森林へと続く風景が世界的に見れば、決して当たり前ではないということである。日本は国土の7割近くの森林率を持つのに対し、中国は現在2割の森林率を目指し、国家的プロジェクトの植林活動を進めていると聞く。

このような森林は、水資源涵養の根源をなす。森林が育む水は、資源に乏しいと言われる日本において、数少ない天賦の資源なのだ。しかし、それはモンスーン気候の端に位置し温暖湿潤な日本列島の島々に恵まれた降水があるからだけではない。先人たちが多大の人力と費用をかけ愛しみ育てた森林があつてこそ雨を湛え、その水を緩やかに川に流し、流域を潤すことができるのである。信玄などの戦国大名が領国支配の重要事項としたのは、治山治水であつたし、徳川幕府の時代には、天領だけにとどまらず、藩においても全国的に植林と利用管理を進めた歴史があつた。

我々日本人は、西日本の一部の地域を除けば、ほぼ水不足を感じないで家庭生活を営んでいる。日本人は世界平均の2.5倍の生活用水を使っていると言われるが、世界の2割の人々は安全な飲み水さえ入手できないでいる。さらに、2025年には28億人、約35%の人々が十分な水を入手できない状況に陥ると予測される。

また、水の多くを利用する農業でも水の問題は深刻である。世界的に降水量が少なく灌漑のために河川・池沼からの取水が困難な地域では、食糧生産を増大させるのに地下水を汲み上げてきたが、その結果地下水位が低下し、土地の塩害、乾燥化の問題が指摘されている。

ややセンセーショナルに報じられている部分もあるが、日本でも水源林など山地の外国資本による買収の動きは今や否定できない事実のようだ。

一方、わが国は世界有数の森林国でありながら、国内の木材消費の8割を占める外国からの輸入材に圧され機械化の遅れや林業就業者の高齢化とも相俟って、十分な維持管理が施せない極めて厳しい状況に追い込まれている。水資源は生命を守るライフラインであり、かつ農業や製造業をはじめとする様々な産業活動の基盤をなす社会的インフラとして公益的機能は極めて高い。8月に公表された平成21年版水白書「日本の水資源」のなかで「水源の涵養等の機能の維持向上を将来に渡って図っていくためには、100年先を見通した多様で健全な森林の整備及び保全を進めていく必要がある・・・」との認識を示している。世界的な水資源争奪の動き等も踏まえ、超長期的視点に立ち水資源とこれを涵養する森林を適切に管理していく仕組みを国民的合意のもとで構築することが、喫緊の課題だろう。